# 序

支那民族を簡單に說明すれば、其は華夏族を起原とし、漸次數多の異族と雜婚融合を遂げつつ、黃河中流の地域から漸次他地域に及び、特種文化就中同一の文字と、儒敎との偉力に依り、統一せられた合同體であると謂ふことが出來ようと思ふ。此の合同體の本質を布衍說明するのが、本研究の主要目的である。然し此の研究に筆を染むるに先ち、豫め以上述べたる性質からして、如何なる支那民族が出來上つたか、換言すれば以上性質よりして、漸次享有するに至つた支那民族の特徵につき、二三說明し置くことは、本書を讀むものに、幾分か余の底意の有る所を傳ふる所以でもあるから、玆に簡單に之を披瀝して置きたいと思ふ。

第一　支那民族は雜種の民族である結果として、吾人は其內容をなす支那人に、左の如き特徵あるを認むる。

1、體質强健で、忍耐力がすぐれてゐること

2、生活力豐かに、繁殖力旺盛なること

3、才智優れ、利害に聰きこと

4、人型多種多様で、文化が進んでゐること

5、思想的傾向がコスモポリタンであること

尙支那民族は適當の時機に於て、屢ゝ清鮮なる異族の血液の混入を受けたので、民族として老衰のことなく、常に元氣を持ち、四千餘年の壽命を保つて來たことは、玆に特筆に値する。

第二　支那民族は戰爭の結果よりも、專ら文化により打建てられた民族である。そして其文化は儒教を中心とし、其傳播は文字の普及即ち漢字の普及によつてなし遂げられたのであつた。其結果として支那人の間には、左の如き特徵が認めらるるに至つた。

1、文字を尊ぶこと

2、天命を信ずること

3、禮讓を重んじ、辭令に巧なること

4、父母を敬ひ、祖先を尊ぶこと



5、實際的で、中庸の道を辿らうとすること

尙學者によりては、儒教が尙古思想に偏してゐると判じて、其が支那民族を保守的ならしめたと言ふものあるが、これは的外れの謬說である。支那民族が思想的に保守的なるものあるは、蓋し農業民族なるより來る經過的現象で、若し支那民族にして其經濟的發展過程に於て農業より商工業時代にも進まば、余は其思想は保守より直ちに進取に變るものであらうと思ふ。儒教の思想は必ずしも保守的ではない。

第三　前述せる第一及び第二の原因は、更に環境の偉力と相合して、支那民族に左の如き特徵を生んだ。

1、平等を愛し、階級を排すること

2、尙文主義なること、從つて平和愛好的なること

3、雜婚を厭はないこと

4、同化力に富めること

尙是等の特徵は支那民族を驅りて、自ら世界的民族たらしめた。

第四　更に支那文化が過去に於て優秀であつたことは、支那民族をして自ら自尊心を强め、他に對し驕傲の態度を持せしむるに至つた。これは止むを得ざる支那民族の缺點である。これは支那民族の更新上大いに反省匡正すべき點であると思ふ。

第五　更に又宋以來政權の失墜上、偏狹なる漢族主義が鼓吹され、それが近時は轉じて排外熱を刺戟し、支那民族をして排外主義者なるかの如くに認めしめらるるに至つた。然し支那民族は元來が平和愛好の民族で、平和さへ保持せられ、自己の生活が脅威せられない限り、政權が何人に歸屬するかの問題には、餘り關心を持つものではない。漢族主義とか、排外主義とかは、支那民族が政權慾者の煽動に乘ぜられて發生する一時的經過的興奮に過ぎないと思ふ。尤も支那の民族的意識が此程に至り大いに一般化さるるに至つたのは、見遁すことの出來ない事實である。換言すれば其は士太夫若くは上中流の手より漸次國民のものとなるに至つた。これは又近時に於ける支那民族の特質であつて、蔣介石は實に此の意識の上に立ちて、排日抗日を叫んだもので、彼が今次の日支事變に於て、連戰連敗を繰返し乍らも、依然として我に對し頑强に抵抗を續け得られた所以亦玆に在つたものと余は信ずる。

第六　尙更に又支那民族の特徵として注意すべきは、支那民族は組織力乏しく、國家としての團結が鞏固でないことである。支那民族に組織力の乏しいといふことは、誰でも認めてゐる所で、其は何故であるかに關しては、確定意見がないが、余を以てすれば、其は雜種より生ずる缺點ではあるまいかとも思ふけれども、其は更に研究問題として殘すこととし、他面から之を考へて見るに、其は又後天的原因に依るもので、儒教が孝道を第一とし、忠を第二に置いてゐるのみならず、社會を橫に結合すべき敎義に乏しいから來たものではあるまいかとも思ふ。

そは兎に角支那民族が國家としての組織力に缺乏してゐることは、近時の國家競爭に顧み、大いに憂慮すべきことで、支那民族の存亡は、忽ち我國の存在に影響し、且つ白色列國が人種主義を固執する關係上、其は引いては黃色人全體の運命に關するものでもあるから、吾人は其を重大視せずには居れない。思ふに我國は其持つ組織能力の全部を發揮して、其の擁護に當り、かねて其が支柱とならねばならぬ。そして東亞を保全し、更に又黃色人種を保全せねばならぬ。これ天の我に課したる使命である。

以上は簡單ながら、余が本研究の結果抱懷するに至つた支那民族の特徵に關する卑見の一端

であるが、余は讀者が本研究を繙くに當り、此心を以つて之を一讀せられんことを切望するのである。

尙支那民族性に就き、汎く之を論じようとせば、本序劈頭に述べた支那民族の概念に基き、支那の各地域に關しても考察を遂げ、其と支那民族との關係をも取扱ふべきである。然るに本研究は餘り此の點に觸る所がなかつた。從つて本研究は支那民族に關する全般的研究とは見做すことが出來ない。然し支那民族の重要なる部分は大體に於て余は玆に之を取扱ひ得たと思つてゐる。就中余が本書に特に重點を置いたのは、支那民族の同化力の偉大なるものあるを示すに在つた。これは我國が今後其圈内に各種の異族を抱擁し、之が融合同化に腐心せねばならぬ必要に迫られ來つた折柄、支那民族から何等かの敎示を得たいと思つたからでもあつた。

余は本研究に於て、初め「民族の理論的研究」や「支那民族の起原に關する研究」を始めとし、更に「融合未了住民の運命」、「華僑の發展」最後に「支那民族と帝國の使命」等の各章を收錄する積りであつたが、其等は紙面の都合等もあり、遺憾ながら悉く之を删除し、他日發表の機會を俟つこととした。然し其代り余は各章末又は各節末に漢詩を添附し、以つて幾分たりとも本書を讀む人に興味を持たしむることとした。讀者乞ふ之を諒せよ。

尙本研究は、拙著「現代人種問題研究」の中に取扱つた「支那史に於ける人種的感情」と、其本質に於て大體變る所がない。然し後者は主に人種的立場から、支那民族を眺め、前者は專ら民族の融合統一の上から、之を取扱つたものであるから、兩々相對照して一讀せば、余の支那民族に對して抱く見解の如何を明瞭にすることが出來ようと思ふ。特に玆に之を注意する。

終りに臨み、本研究は余が嘗て支那在勤の際に起稿したものであつたが、其後公私意の如くならず、脫稿は延び延びとなつて、今日に至つたもので、取扱上缺點があり、又充分に意を盡さざるものも尠からずあると思ふ。然るに此程偶々早稻田大學敎授經濟學博士牧野輝智氏の御盡力に依り、幸にも玆に之を上梓することを得たのは、余の望外の光榮とする所で、余は本書出版に當り、玆に之を特記して、厚く同博士の御厚情を深謝する。

昭和十五年初秋、皇軍佛印への進駐を聞きつつ

著　者

# 目次


總論……一

第一章　支那民族發生論……六

第一節　有史以前の支那……七

第一項　人類學上の支那……八

第二項　傳說上の支那……一三

第二節　殷族の出現……一九

第三節　周王國と支那民族發生への基礎……二三

一　優秀なる文化は異族の精神を統一した……二四

二　人種平等主義を採つた……二八

三　同姓不婚の習慣があつたこと……四一
四　土俗尊重……四四
第四節　周朝の衰微と蠻族……四七
第五節　春秋戰國と民族意識の萠芽……五一
第一項　秦の由來と種族開放主義の成效……五七
第二項　楚の由來と夏化……六一
第三項　趙と異族融合……六五
第四項　燕と異族融合……六八
第五項　齊と思想統一の使命……七一
第六項　魏の文化的使命……七四
第七項　韓の文化的使命……七六
第八項　列國の依存關係……七七

第二章　支那民族成立論……七九
第一節　秦の天下統一と支那大民族の出現……七九
第二節　漢代支那民族の融合强化……九一
第三節　漢の外征と異族の同化……一〇一
第一項　匈奴と支那民族との關係……一〇三
一　匈奴の人種的檢討……一〇三
二　匈奴の擊攘と西域の開拓……一〇六
三　塞內匈奴の漢化……一一三
第二項　東胡族と支那民族との關係……一一五
一　東胡族の人種的檢討……一一六
二　烏桓の叛服……一二〇

三　鮮卑出現と其歸順……一二三
第三項　羌族と支那民族との關係……一二四
一　羌族及其起原……一二四
二　羌族の鎭撫と其漢化……一二六
第四項　越族と支那民族との關係……一三四
一　越族の人種的檢討……一三四
二　越族の動向と漢の對越族策……一三六
第四節　兩漢と支那の民族に就いて……一四二
第三章　支那民族の混亂……一四四
第一節　中國の分裂と支那民族……一四五
第二節　晉の統一と異族の塞內移住……一五三
第三節　異族の跳梁……一五八
第一項　匈奴の活躍……一五九
第二項　氐羌の活躍……一六三
第三項　鮮卑族の活躍……一六七
一　肥水戰前に於ける鮮卑族の活躍……一六七
二　肥水戰後に於ける鮮卑族の活躍……一六九
第四項　異族侵入の支那民族への影響……一七二
第四節　南北民族性の相違發生……一七四
第五節　南北兩朝の對立と北朝の漢化工作……一八二
第六節　民族的混亂の意義……一八六
第四章　支那民族再生論……一八八

第一節　隋朝と民族統一の使命……一九二
第二節　唐代民族の融合調和と民族圏の擴大……一九六
第三節　安史亂後に於ける異族の活躍……二一〇
第四節　北狄南下の民族的影響……二一四
第五章　異族支配へ……二一九
第一節　宋代民族意識の旺盛……二二〇
第二節　契丹族の南下と宋の對策……二二四
第三節　女眞國家(金)の北支支配と宋の南渡……二三〇
第四節　西夏の出現……二三六
第五節　蒙宋同盟と金國の沒落……二三七
第六節　宋の衰亡と蒙古の登場……二三九
第六章　元の漢族支配……二四五
第一節　元の興起と其種族的檢討……二四六
第二節　元の漢族統治……二五一
第三節　漢族の再起と元の終末……二六三
第四節　漢族主義の擡頭……二六五
第七章　漢族の民族的自由の復活……二六八
第一節　明朝と復古政治……二六九
第二節　明の華夷差別論と帝國主義……二七二
第三節　明代思想の統一と其民衆化……二七七
第四節　北方異族の再起と民族自由の終末……二八〇
第八章　異族支配の再現……二八三

第一節　清朝の由來と其覇業……………………二八四
第二節　清の異族統治……………………二八六
第一項　清の漢族統治……………………二八七
第二項　清の對從屬民族政策と漢族の發展……………………二九六
第三節　民族思想と革命……………………三〇五
第九章　支那民族の特質……………………三一一
第十章　支那民族の行方……………………三一三
結　　論……………………三一六

# 總　　論

支那民族は常に作られつゝある。

黃河中流の谿谷を根據とし、殷部族が各地の氏族部族を從へ、以つて一種の種族同盟を構成してより、殷の比較的大なる種族團體の發生を見、次で異族周は更に其氏族部族を基礎とし、殷の種族同盟を破壞して、其の上に中央集權を樹立して一層鞏固なる團體を作つた。此の中央集權の下に在る住民は一般に開化に赴いて居り、支那では之を華夏族と稱へ、文化が他に優れてゐるのを誇りとしてゐる。

然るに周室衰へ、春秋時代を經て、戰國時代ともなるや、血統主義や門閥觀念は破壞され、個人主義擡頭し、社會は個人の競爭に依つて動くといふ情勢となり、そして此の情勢は引いては諸國の有識者間に自ら民族てふ大なる意識觀念を浮ばしむるに至つた。

秦は此の意識の波に乘つて六國を統一し、强力なる中央集權の下に一大民族の結成を遂げ、

勅勒歌　　無名氏

敕勒川陰山下　天似＝穹廬、　籠＝蓋四野、　天蒼々野茫々　風吹草低見＝牛羊、

題陳叔寶之屏風　　千金公主（大義公主）

盛衰等朝暮　世道若浮萍　榮華實難守　池臺終自平　富貴今安在　空事寫＝丹青、　杯酒恒無レ樂
絃歌詎有レ聲　余本皇家子　飄流入＝虜廷、　一朝覩＝成敗、　懷抱忽縱橫　古來共如レ此　非我獨申名
唯有明君曲　偏傷遠嫁情

怨歌行　　北周　庾信

家在＝金陵縣前、　嫁＝得長安少年、　回レ頭望レ鄉淚落　不レ知何處天邊　胡塵幾日應盡　漢月何時更圓
爲＝君能歌＝此曲、　不レ覺心隨＝斷絃、

## 第四節　南北民族性の相違發生

匈奴劉淵の反旗から、鮮卑の後魏樹立まで、百餘年、黄河以北は所謂胡族の蹂躙する所となり、其結果數多の漢人は亂を避けて南方に移り、所謂民族の大移動が始まつた。

尤も漢人の南方に去つたものは、主として上流社會のもの、資産家とも云ふべき人々で、中以下比較的裕福ならざるものは北方に殘留したと察せられる。然るに新に北方に入り込める異族は、匈奴にしろ、氐羌にしろ、將た又鮮卑にしろ、其大多數は官吏か軍人であつたらう。そしてそれ故に彼等は社會の上層を占めたであらう。斯く觀察すれば北方の社會は胡族が上中位に在り、漢人は中下位にあつたものと見なければならぬ。

すべて社會に於て其原動力たるものは、云ふまでもなく槪して上中流の人士である。そして其が輿論を作り、民族の氣風を作り、又は文化の動向を定むるものである。今北支に於て上中流を占むるものは、主として匈奴、氐羌及び鮮卑族であつたこと前述の通りであるから、北支に於ては異族が政權の掌握者であつたばかりではなく、社會的にも其指導者であつた。從つて彼等は北方の輿論を作り、北方民族の氣風を作り、且又文化の動向を定むるものであつた。そして彼等を知ることはやがて又北方民族を知ることでもあつた。

大體北方種族は永らく遊牧生活を營み、槪して粗野であるが强悍にして進取の氣象に富み、其政權を獲得したる後も亦北方人は一般に郊外の狩獵に驅逐するを喜び、其出づるや騎馬に乘

り、儒生も皆兵射に通じてゐた。そして一般に質素で耕織につとめ、勤勉精勵の風があつた。是等の氣風は其地位に顧み北方殘留漢人に影響せしめないやうに勉めても出來ないことであつた。果然右が北方人の民族性ともなつたのである。世に北方人が武斷的だとか質實剛健だとか稱せられるのは、これから發生するものであつた。

然し茲に一考すべきは文化のことである。北方の上層者は文化を持たなかつた。從つて中下層のものを導くべき思想に缺乏してゐた。此の故に北方の上層者は他の文化の吸收に勉めねばならなかつた。果然此の要求に應じたるものは、一方は被征服者の文化で、他方は印度の佛敎であつたのである。

總して文化は其享有するものの地位種族の如何に係らず、其優秀性によつて其が採用を促すものである。支那文化や印度文物は其優秀性によつて、北方人に採用せられたのである。そして此の文化は先づ北方上層者によつて採用されたので、其文化は又自然下に及び、其が北方民族の精神をも支配するものとなるに至つた。

これは逆に統治者が被統治者に支配されたといふ譯で北方人はこれによりて知らず識らずの間に支那と同化してゆくのであることが會得される。

斯くの如く北方に於ては、一方では胡族の特有氣質を保持しつつ、他方では被統治者たる支那人の文化に同化されつつ、茲に新たなる民族を生むのである。

今北方胡族が支那文化や印度文化の採用したことに關し其一斑を示せば、

例へば漢の劉淵は少くして詩書尙書を習ひ、左傳を好み、孫吳の兵法等に亘りて、幽冀の儒者の仰ぐ所となり、その子聰も亦歷史に通じてゐた。慕容皝は經子を尊び、天文を善くし、秦の符堅は博學にして大學を興し、姚興は常に經籍を講じて兵間にあるも其業を廢せず、長安は一時經學の中心となり、當時姜龕等皆耆儒碩學にして各々門人數百人に及んだ。北涼の沮渠蒙遜亦經學を崇びて學者を禮すること篤く、又群史に涉り天文に通じてゐた。

これは北方が儒學を以つて優秀なる精神文化と認めて之を採用したることを證するものであつて、更にそれが又北方の君主獨裁政治を擁護する武器でもあつたから、北方の爲政家は治國上から大に之を保護奬勵した。そして官吏は漢學に素養あることを其登用の條件とされた。從つて漢學は北方一般に行はれた。そしてこれが一般の口頭に上るときに於て、北方胡族は最早

精神的に胡族にあらずして純然たる支那人となるのである。

北方には又印度文化が採用せられた。佛教は其を代表してゐる。北方人が佛教を信ずるは、北方が長年月に亙り戰禍の巷で、悲慘なる生活を送らざるべからざる缺陷に乘じたものではあらうが、又長安の地が西域との通路に當り、印度の文化に接觸するの好機を占めてゐたからでもあらう。

彼の有名なる僧鳩摩羅什は西域龜玆より長安に來り、上下を通じて尊崇せられ、傍ら經典の譯出を企て、又後秦の僧法顯、寶雲、北燕の曇摩喝等前後して西遊行を企てた。燉煌の石佛は前秦の僧作僧の作と稱せられる。

斯くの如く印度文化も亦北方人士の日常生活に這入り、北方人の民族心理を陶冶してゐた。尤も佛教は更に支那一般にも普及したので、北方に限られたものではないが、北方は他方より特に之が崇奉せられたのである。

以上の如き狀勢の下に北方の民族性は培養せられたのであるが、これは後來支那が南北統一した後に於ても容易に解消せらるるものではなかつた。

以上は北方の民族性に就いて物語つたのであるが、然らば南方は如何。要するに南方にも亦北方に於けるが如く南方の特有性を發揮したものがあると信ずるから、余は左に之を敍說することとする。

先づ西晋の滅後、漢族は東方に王朝を建てた。それは史上東晋と稱せられ、建業は其都である。そして此の東晋は固有支那民族を代表して、北方胡族の諸政權と相對したのである。

これより先き北方在住の漢人は、戰禍の巷より避くべく、揚子江を渡りて南下するもの多く、今や晋都も新たに建業に立てられたるものあり、所謂中國の各族にして南方長江以南に移動するもの更に多きを加へた。そして其等は一時僑姓僑民として所々に僑郡僑縣を建設した。蓋し彼等は北方の古都に對し戀々の情切なるものあり、他日歸鄕の期あるを欲したので、南方は唯一時的の假りの住所と心得てゐたからであつた。從つて桓溫が一時中原を恢復したとき、桓溫は是等を一切北方に還さうとしたが、枋頭の大敗後右計畫も畫餅に歸し、かくする間に五十年の歲月は彼等僑姓僑民をして南方の肥美溫暖なる樂土に安んぜしめて、却つて北方寒烈なる喪亂の巷に還るを厭はしむる傾向を生じた。依つて政府も間もなく庚戌の制を布き、これ等僑民

僑姓の諸人士は、一切其所在地の版籍に登錄し、課役に服せしむることとしたから、これ等は最早一切北方に還ることを斷念した。

曩に漢によつて住民の江淮に移されて空虛となつた閩越地方に、晉人が轉住したと述べて置いたが、其晉人は此の時代に轉住を企てたのであつた。

元來南方は荊蠻、吳、越の地で、其住民は漢族とは異つてゐるものであつたことは、已に屢〻述べた通りである。然し其等は其性北方人の如く慓悍なものではなかつた。そして其地の生活資源に滿足して敢て北方に入寇するなどのことも企てなかつたのみならず、却つて北方漢族の爲めにどしどし侵略されて、敢て之に頑固に抵抗することもしなかつた。南方人は云はば平和的で寧ろ溫和な方であつた。楚以來漢文化に浴して、漢人と同化し來つた。そして今や北方の漢人は潮の如くとは云へまいが、多數此の地へ這入り込んだのである。そして此の地を以つて永住の地と定めたのである。

南方へ轉住して來た漢族は、已に前にも述べたやうに多くは中國の名族であつたので、彼等は南方に於て恰も北方に於て胡族が上流社會を獨占したやうに、上層の社會を占めたのであつた。從つて社會は彼等に依つて指導され、南方は純然たる舊時の北方の移轉であると見得らるべきであつた。即ち衣冠の風や、外出に輿を用ゐ、多數の從者を從へるなど、漢族の舊慣は大に南方に輸入され、しかも其等は南方のみに見らるる現象ともなつた。且又文化の點に於ても南遷漢族の多くは、何れも學藝に嗜へるものであつたから、彼等が盛に漢文化を南方に移植したことは想像に餘りあるべく、これが又南方文化に與へたる影響は大なるものであつたらう。そして其と共に揚子江の開發もこれから漸次見るべきもののあるを致した。

然し南方は純然たる北方漢族其儘の移植であつたらうかといふに、其は然らず。南遷漢族は溫暖肥美なる南方の風化を受くるに及び、其氣風は纖弱優雅となり、其文化風習にも其に伴ひ多少北方と異る色彩を帶ぶるもののあるを招來した。そして更に南方人との混住雜婚は、南遷漢族として南方的就中平和愛好の民族たらしめたのである。

斯くの如く南北の分離は、人の氣質に於ても、將た又文化の內容に於ても、夫々從來とは別な現象を呈するに至り、從つて嚴格に云へば血統的には此の結果により、從來の支那民族は一應解消されたものと見做しても、敢て過言ではなからうかと思ふ。そして今後顯出することあ

るべき統一國家の民族は、右二個の民族を材料として新たに生れ出でたものと認めらるべきであらう。

江　南　春　　　唐　杜　牧

千里鶯啼綠映紅　水村山郭酒旗風　南朝四百八十寺　多少樓臺烟雨中

## 第五節　南北兩朝の對立と北朝の漢化工作

五胡十六國紛擾を極むること百十數年にして北方は鮮卑族の拓跋魏に依りて統一せられ、南方の東晉は位を宋に讓り、玆に史家の所謂南北朝が開始さるるのである。そして南方は漢族の天下で、北方は諸族雜居混合の社會である。かくて南朝は宋より齊、梁及び陳を經てゐる內、北朝は後魏分れて東西魏となり、東魏は北齊に、西魏は北周に奪はれ、北周は北齊をも併せたのであるが、ついで北周は隋に奪はれ、隋は遂に南朝の陳をも滅ぼしたので、玆に天下また一に歸した。南朝宋の初年より、隋の南北合一に至るまで、正に百五十九年を費した。

五胡十六國時代の際に於て、南北に分れたる兩民族性の相違は、更に南北兩朝の時代を經て

其色彩益々鮮明となるに至つた。そして南北朝時代に於ては、南朝は北朝を指して索虜といひ、北朝は南朝を斥けて島夷といひ、互に相排斥して正閏を爭ふに至つた。

然し右の如き南北民族性の相違も、兩者をして純然分離せしめて、二國を建設せしむるほどではなかつた。北方は異族混淆の世界で、政權の把握者魏は東西魏と共に勿論鮮卑族で、北齊高氏も史家は同氏が漢人の系統に屬するものの如くに云ふも、鮮卑化されたる點多く、或は鮮卑と漢人との混血族ではあるまいかと傳へられて居り、又北周は無論鮮卑族であつたので、北方は漢族と離るべき多くの理由を持つてゐたにも係らず、北朝の爲政者は出來るだけ、北方の漢化に勉めたのであつた。

例へば魏の孝文帝は國俗の鄙陋なるを惡みて、都を平城より洛陽に遷して、以つて舊風を一變しようと計つた。卽ち帝は遷都後先づ支那の習慣を採用し、公然同姓間の結婚を禁制し、漢人との結婚を奬勵した。又鮮卑の服制を禁じたるのみならず、鮮卑の國語、度量衡及び國旗をさへ用うることを禁じ、更に王朝の名稱拓跋を改めて支那語の元と定めた。

勿論之に對し國人の或者は此の支那化を喜ばず、私かに胡服をつけて殺されたものもあつた

中華とはいへども花は夏の夜の一夜にかはる罌粟坊主かな

胡歌と厄魯特の俘虜　　　　康熙帝

雪花如レ血撲二戰袍一　奪二取黄河一爲二馬槽一　滅二我名王一兮虜レ我使レ歌　我欲レ走兮無二駱駝一

嗚呼黄河以北奈レ若何　嗚呼北斗以南奈レ若何

康熙帝噶爾丹を滅ぼし親ら歸化城に次し、西路凱旋の將士を慰勞す、坐に老胡の笳に工なるものあつて歌ふ、高調悲壯、歌ひ終りて地に伏して謝す、帝大いに笑ひ手書して太子に告ぐ。

# 第九章　支那民族の特質

以上を以つて余は大體支那民族論を述べ終つたのであるが、之を要するに支那民族は毫も單一民族ではない、上古に於て其骨子をなしたものは、無論華夏族ではあつたが、秦が六國を統一して支那民族を形成したときに於ては、其民族には已に數多の種族が混入してゐて、華夏族は實は其一部分に過ぎなかつたのである。其後前漢を經て後漢末になると、匈奴即ち土耳古族は支那本部に進入し、山西省の北境、湖北省に居住を定め、戎族も亦江西省、陝西省に進入して來た。そして其等は西紀第三世紀末には人口約百萬に達したと稱せらる。是等は第四世紀に至り漸次勢力を占めたが、次第に漢民族に同化され、第五世紀の頃には支那土民と殆んど異る所なきまでに至つた。其後更に降つて北方族たる東胡族の鮮卑、契丹、及び女眞族等は又南下を企て、其等は黄河の沿岸に來り、元朝の經濟史に依ると、侵入地に已に農業に從事したとあるから、漢族と混和融合したことは明かで、尙降つて十七世紀頃には更に滿洲族の南下するあ

り、これ亦漢族と混住し、漢族と融け合つたのであつた。

斯くの如く漢族には北方異族が多數混入してゐる。更に轉じて南方を顧みると、南方には湖南省荊州を中心として荊蠻が居り、其南には武陵蠻（卽ち近世苗猺族の先祖）が居り、其東南には吳及び越族が居た。そして更に南端には百濮が居た。是等は如何なる種族に屬するかに關しては學者間に意見の一致がない。李濟氏の云ふ所によると越族と百濮とは同一族で撣單（Shans語族）族であらうとし、其等は上古揚子江沿岸に生息してゐたといふのであるが、此の論は暫らく措くとし、漢族は楚に依つて先づ荊蠻を漢化し、漢代を經て晉の時代以降、北方異族の壓迫を受けて南遷するや、漢族は徐々吳越及び百濮と接觸し、之を漢化し、其遁れて雲南方面に走れるものは後來諸國を建てたけれども永續せず、是亦久しからずして漢族の爲めに同化せしめられた。かくて南方に於ても漢族は多數の異族を接收し、大支那民族を作つたのである。そして更に武陵蠻に對しては、漢代に於て湖南及び江西の北境より湖南の西境に移動せしめ、次で徐々貴州を經て雲南に走らせたのであるが、此の族は容易に漢族に同化せず、屢々反抗を企てた。

更に支那の西方にはチベット・ビルマ族が居た。漢族はこれとも接觸したのであるが、同族は餘り其居所を他に移動せざるのみならず、漢族に於ても餘り深く此の地に進入しなかつたので、兩族の接觸は大々的のものでなく、從つて此の族の漢化は充分なるものはなかつた。

以上の外三國時代の記錄には、安徽省の一部にネグリトの居住が傳へられてゐるが、其數極めて寡く、爾後其跡を絕つた。

かくの如く支那民族の中には、諸種雜多の異族が混入してゐるので、支那民族は毫も單一なる純血民族ではない。これ支那民族の本質である。然るに支那の學者及び政治家の間には屢々華夷區別論が行はれ、異族の排斥を主張するものあるは、笑止千萬、己を知らざるものと云ふべきである。尤も前述せる諸種異族が支那民族への混入程度は、種類に依つて夫々異るものがある。今これに關し調べてみると、北方族に就いて云へば東胡族が最も多く支那民族に混入し、匈奴、羌及び蒙古族等この次に位し、南方族に就いて云へば擺夷族最も多く支那民族に混入し、苗族や、チベット・ビルマ族はこの次に位し、次に又右異族の漢族への同化程度に關して調ぶるに、東胡族、擺夷族は容易に漢文化を受入れ、匈奴、羌、蒙古族、チベット・ビルマ族等は

稍困難を覺え、苗族に至つては漢文化に對し最も不關心の態度を示してゐる。

以上の如く支那民族は混合民族である結果としてそれは民族に大いに活力を賦與した。次に余は其混合と支那文化との關係を述べ民族の優秀性を一瞥しよう。

之に關して余は先づ南北朝の文化と、其次に發展した隋、唐の文化を想像せざるを得ない。北朝は已に本論に述べた通り、夷狄混入の上に立つてゐたにも係らず、其文化は毫も南方のそれに劣るものでなかつたことは、今更ら玆に之を縷述する必要はない。これは異族混入が民族を低下せしむる所以にあらざるを證するのみならず、否其は却つて向上發展せしむる所以を物語るものではあるまいか。更に隋及び唐の時代に至つては、支那民族は數多異族の混入により殆んど再成せられたと云つても差支ない位であつたにも係らず、文化は燦然として支那史を飾つてゐる。これ亦異族混入が却つて文化を發展せしむる所以を示すものではあるまいか。更に近時史家の研究によると、隋の帝室楊氏も將又唐の帝室李氏も共に北方族の血を混入せしめてゐると主張せらるる次第もあるので、これは混血が却つて優秀者を產み出す所以を物語るものでなくて何であらう。

然し南宋以後に於て、支那の文化が北方より漸次南方に移つて來た事實もあるので、學者によりては北方が雜婚に雜婚を重ねたので、北方に文化が荒廢し、之に反し南方には優秀なる漢族が南下し、其純血を持續したから、文化が南方に榮ゆるに至つたのだと云ふものもあるが、右事實は仔細に考ふるに血統關係よりも寧ろ環境の變遷に依るものであらうと思ふ。

先づ事實問題として考ふるに、北支は五代から元初に至る約三百五十年間に於て、或は契丹或は女眞或は蒙古と絕えず塞外種族の壓迫を受け、又は其支配を受けたのであるから、其地に文化が破壞せられ再興容易ならざるものあるを致したのは勿論のことであつた。此の事情は南宋以後北支に文化の又見るべきものなきに至らしめた所以で、之に反し以上の期間を通じて南支那は終始漢族の君主を戴き、塞外種族の壓制といふ災厄から超脫してその學術、文藝を保存助長することが出來たのであるから、自然は其地に南宋以後文化發達し、遂に支那文化の中心地が徐々南方に遷るに至つた所以で、要するに南方文化の發達は人種的のものでなくして全く環境の變遷に依るものであらうと思ふ。

尙支那民族が四千餘年の古から、依然として同一民族として現時尙其生命を保つことを得た

所以は如何。之に關しては數多の原因あるべきも、吾人は是亦支那民族が融合民族であつた事實、其ことに依るものであることを信ぜざるを得ない。即ち融合によつて民族的衰退を防止し、其生命を永續せしめ得たのであつたと思ふものである。さらば民族の混合は又其永遠性にも影響を與へた。

元來支那民族は已に總論にも述べて置いた通り、平和愛好の民族である。平和愛好の民族は時代を經るにつれ内に奢侈遊惰の風を生じ、自ら頽廢の氣分を招くものである。此の場合右民族にして何時か非常の刺戟を受くることがなかつたならば、右民族は自然衰亡すべき運命に置かるる。支那民族も平和愛好の民族なる結果、長い過去に於ては屢〻此の兆候を示した。然るに支那民族に於ては幸にも時に應じ屢〻外部よりの刺戟を受け、漸く其活力を恢復し將に陷らんとする衰亡から免かるるを得たのであつた。そして此の刺戟は實に西北方よりする異族の侵入であつた。

北方族は概して其體質强健、氣力旺盛、如何なる辛苦困難にも打克つべき素質を具へてゐる。支那民族は實に此の北方族の侵入に依る刺戟を受けて活力を持續したのであつた。

人が衰弱に陷つてゐるとき、之に或種の醫藥又は注射を施せば、其人は自ら其勢力を恢復する。このことは民族の場合も亦同樣である。今支那民族の衰退期に於ける北方異族の侵入は、實に支那民族に醫藥又は注射を施したもので、剩さへ此の異族は前述せる通り、其體質に於て將又其氣力に於て其比を見ざるものなるに顧み、其が支那民族に及ぼした效果は實に偉大なるものがあつたことを疑はぬ。

即ち右異族の支那民族に及ぼせる作用としては、一面に於て新しき血液の混入によつて支那民族の元氣を恢復し、他面に於て精神的に其勇猛心を刺戟して更に清新の氣に蘇がらしめ、以つて民族的頽廢を救つたのであつた。

かくて支那民族は他族との接觸融合によつて、却つて其生命を復活延長することを得た次第であつて、この點は支那民族が他と類を異にする所であらねばならぬ。然るに更に支那民族が支那民族として澎脹發展し來たつたのは、又其が他族を融合同化せしめ得る力を持つてゐたからである。然らば其力は何であつたか。これは支那民族が優れたる同化力を持つてゐるからである。茲に改めて概括的に其偉力を要約し、以て支那民族性の根本義を明にしたいと思ふ。

一、支那民族は四圍の異族に比し、杳かに優秀なる文化を持つてゐるものであつたので、其力により異族は裴然として之に吸收同化され、久しからずして其個性を失ひ、其結果支那民族は多少其内容は變へたが、依然として支那民族として殘存することを得た次第である。

一、支那民族は其本質に於て武斷的でなく、寧ろ文治的平和的民族であつたので、よく他族を自己に信服同化せしむることを得た。

一、支那民族は人種的感情乏しく雜婚を厭はない民族であるから、自ら他族を包擁することを得た。

一、支那民族は平等を尊び、他族なるの故を以つて之に差別待遇を與ふるの根本思想なく、禮を守る場合に於てすべて之に一視同仁の取扱をなしたので、國内に階級なく、他族亦支那の民族社會に入るも他國人たるの感を持たなかつた。

一、支那民族は他族の風俗習慣に對し寛大で、敢て之を破壞消滅しようなどとは考へなかつたので、民族的融合も自然に進行することを得た。

一、支那民族は文化團體として人口の繁殖力強く、漸次他を淩駕するものあり、この勢は他の少數族に於て到底抗することが出來ず、自然支那民族に同化させられたのである。

以上は支那民族の特性で之が他を同化せしめ得た主なる勢力で、又國内民族をして一層强靭ならしめた所以でもあつた。斯くて一方に於ては常に其血を新にし、他方に於ては其同化力により同一民族として永く其生命を持續し、以て世界民族史の上に於て一大異彩を發揮することを得るに至つた。

思ふに昔時ローマ帝國は誠に偉大なるものであつた。然し其治下の市民は融合せられて一民族を形成するまでに至らなかつた。別言すれば其市民は地方的には民族を作つたけれども、其相互の間に融合なく、統一は唯武力に依るのみであつた。從つて武力が各民族に及ばないやうになつたとき、そこにローマ帝國は崩壞し、ローマ市民は消失した。そして其跡に新たな數個の民族は發生したのであつた。さらばローマの市民を以つて支那民族に配し、支那民族の類例を玆に求むることは出來ぬ。豈んやローマ市民は已に歷史上のものとなり終つてゐるのである。尤もローマが武力以外法律に依り或は又宗敎により國内を統一したことがあるのは事實である。然しこの事實はローマ市民を民族化するまでには至らなかつた。假りに一歩をゆづりそれ

がローマ市民を民族化したとしても、其民族はローマの崩壊と共に崩壊して、現時は全體として何等其形跡を留むるものがない。支那民族の依然として其存在を全ふするものと比すべくもない。

其他史上バビロニヤ、アッシリヤ、埃及、希臘など色々の帝國が發生し、其下に恐らく一大民族を形成したものもあつたであらうが、其民族は帝國の衰亡と共に衰亡し、今は唯其一部が辛うじて其殘骸を止むるのみで、誠にあはれなものとなり果てたのである。

更に近世に於て英帝國の如き、其支配する領土は宏大なる區域に亙つてゐるが、其治下の人民は毫も一體の民族を形成してゐるものではない。其は唯英國の勢力に依つて漸く維持せらるるのみで、英本國にして若し國力を失墜せば、右帝國の人民は自ら分離瓦解すべき運命に置かれてゐる。別言すれば英帝國は民族の上に立つたものでないから、英本國が滅亡すれば其帝國は分解作用を行つて消滅し、支那民族の如く一體のものとして存續することはないであらう。更に又印度は民族として支那民族の如く偉大なる存在をなしてゐるものの如くに見ゆるものあるが、その住民は毫も支那民族の如く融合統一せられたものではない。印度に於て種族は多數の階級に分れ、現在尙依然として階級意識濃厚にして相反目鬪爭を事とする次第もあつて、印度の住民は毫も之を一民族と見ることは出來ない。從つて、印度の住民を以つて支那民族と同樣視することは出來ない。但し印度婆羅門教の文化は不思議にも印度人の各層に普及してゐる。

斯くの如く世界史は屢〻大帝國の建設を傳ふるも、其民族に至つては融合統一せらるゝこと支那民族の如きものなく、從つて帝國の消滅と共に其住民は常に其存在が失はれ、前述する如く或は死滅し、或は他に併合せられて、現在は其一局面を示すのみである。

論者云ふものあり曰く希臘の衰亡は雜婚の爲めであつた。ローマの衰亡亦雜婚の爲めであつて、雜婚はすべて民族を墮落せしめ衰亡に導く所以である云々。所論果して眞か、余は深く之を疑ふ。何となれば其は支那民族の場合に於て適用されないからである。

即ち支那に於ては民族は依然として太古の民族が基礎となり、漸次他を併合同化し、雜婚に雜婚を重ね乍ら、時勢の進展と共に擴大强化せられて今日に及んだ。其の間之を統治した王朝は屢〻變つたのであつて、國名は改められたものがあつたが、これは唯形式的のもので、形式は本體たる民族を改むることは出來なかつた。別言すれば支那に於て、帝國は自餘の帝國と異

り、支那民族の帝國であつて、支那民族は帝國の支那民族ではなかつた。從つて支那に於ては帝國は改められても、支那民族は依然として變ることなく其生命を持續したのであつた。支那の偉大なるは帝國の偉大なるにあらずして民族其ものが偉大なる點にあるのである。

然るに此の民族も近代の兆候からすれば、政治は腐敗し道徳は頽廢し、正に所謂史家の民族的老衰期に這入つたやうにも認められる。そして外患は常に至り、西藏や外蒙は英・ソに蠶食せられ、滿洲は獨立し、最近では歐米諸國のはかなき援助の申出でを空頼みに、日支事變をさへ惹起し且つ之を長引かせてゐる。

然し日支事變は我に有利に進捗し、東亞新秩序の聲明の下に、我國は大陸の地に於て着々其實蹟を擧げてゐる。

これは支那民族從來の歷史から考へ、支那民族回復の道程なるか。そして我國は昔の北方族か、元か、清か、將又より一層偉大なる勢力か。これ次に研究して見たいと思ふ問題である。

# 第十章　支那民族の行方

元朝時代より歐洲よりの勢力は徐々支那に侵入し初め、清朝に至り更に其度を加へ、中華民國に至りて其は絕頂に達した。そして其勢力は政治、經濟、文化に亙り、及ばざる所なきに至つた。かくて支那の政權は歐米の勢力に依存し、經濟に於ても歐米の資本主義の經濟に蹂躪せられ、思想に於ても大體歐化され、儒教を以て國民教育の大方針としたる從來の主義が排斥され、更に社會制度として國民生活を鞏固ならしめ來つた家族制度も漸次すたれて、歐米の個人主義之に代はるに至つた。元來支那民族としては數千年以來家族を基礎とし、儒教的精神によつて結合し來つたもので、支那民族から之を奪へば最早そこに支那民族はないこととなる次第であるが、今や前述の通り、此の習慣、此の精神は將に其姿を隱し、歐米のそれが之に代らうとしてゐるので、支那民族は最早支那民族として存在することが出來なくならうとしてゐる。

加ふるに蔣介石政權は政治上に於て一層歐米に依存し、支那民族は實際上歐米の植民地住民化

せられようとしてゐる。そして近時更に驚くべきは、海邊地方に於ける歐米資本主義の犧牲となつて、貧困にあえぐ奥地農民の間には、ソ聯共産主義の魔の手が延びて、日に増し赤化思想が瀰漫し、それは更に支那民族を一般的に赤化せずには止まない狀勢を呈し來つた。これらは支那民族にとり、其存在上由々敷大事と謂はねばならぬ。

これは詮ずる所、支那勢力の微弱の致す所、止むを得ざる次第ではあるが、然し之を放任するときに於て、其は引いては我國に影響し、其結果は一般的に黃色人としての運命にも係はるものであるから、我國は支那民族の運命を對岸の火災視することが出來ない。

かゝる間に蔣政權の歐米依存は、遂に抗日侮日政策となり、玆に日支事變は勃發するに至つたが、然し此の事變は却つて四億支那民族の運命を絕望の域より救ひ、光明に向はしむる導火線となるに至らうとする。これは支那の爲に將又東亞の爲めに大いに慶すべきである。

然らば其は如何なる意味に於て、支那民族に光明を與ふるか。それは云ふまでもなく、我が救の手に依り、支那民族の歐米從屬化を淸算して、之に自由獨立を享有せしめ、更に進んで日滿支協力して東亞固有の文化の上に新たなる世界的文化を創造し、以て黃色人として白色人と相對し、世界人類向上の使命を全ふしようとするのであるから、これは慥かに支那民族に大なる光明を與ふるものでなくてはならぬ。そしてこれは又支那民族の一般に喜び迎ふるものであらねばならぬ。然しこれが達成は前述せる通り一に我國家國民の双肩に在るのであるから、其任や重且つ大と謂ふべきである。

然らば其達成の方法は如何。別言すれば我國は如何なる方法を以て支那民族を救ふか。以下余は此の問題を究め、其結果浮び出づる支那民族の姿を瞥見しようと思ふ。

先づ支那民族を自立せしめて、再び自由獨立の生活を全ふせしむるには、第一に政治を改善せねばならぬ。今回の事變は歐米依存の蔣政權を斥け、引いて我と協力を誓へる汪政權を樹立せしめたのみならず、飽くまで我國は汪政權の支援を惜まない決意を表明してゐるのであるから、これにより支那政治は大いに改まるものあるべく、そして更に日本は日滿支三國一體となつて東亞新秩序の建設を企てゝゐるのであるから、これと協力することにより支那はいよいよ東亞に歸り、日滿兩國民と共に從來にない民族的繁榮を招來するに至るであらう。

この日滿支一體は如何なる形式に依り達成せらるゝか。之に關しては前板垣陸相等の提唱す

る東亜聯盟論あり、或は更に進んで合同國家論があるが、今の所何れが具體化さるゝかは未定なるも、何れにしても三國の政治的接近は疑の餘地がない。

　元來政治の接近は民族を異にするものの間に大いに融合の機會を促進するのであり、就中其は民族が同種同文の場合に於て、殊に其實あるは、由來歴史の證明する所であるに顧み、今回我國の努力の結果、日滿支三國がいよいよ政治的に接近することともならば、行く行くは三國民族は、相互交通其他の影響を受け、大いに意思の疎通が圖られ、三民族は民族的に一體となるに至るべきや疑はない。若し果して然らば支那民族は東亜民族の一部として厳然たる存在をなし、以て歐米白色人種と平等の地歩を取戻し、世界雄飛の基礎を築き得るに至るであらうことを疑はぬ。

　尚茲に一言すべきは、今回の日支事變は、毫も日本が支那侵略を企圖したものではないことである。別言すれば今回の日本の態度は曩の金や、元や、清のそれと毫も同一視せらるべきものではない。今回の我行動は前述の通り全く東亜の解放運動であつて、他の何者でもない。

　次に經濟の問題に就いて考ふるに、支那は云ふまでもなく歐米の資本主義に禍せられ、國内の産業は荒廢に歸せしめられ、此の結果國内は經濟的に益々貧困に喘ぎ、かくて支那が歐米依存となり、將又奥地農民間に赤色思想が蔓延し始めたのも、其原因の一は確かに茲に在るものと認めざるを得ない。斯くの如きは支那民族として忍ぶべきものでない。從つて支那民族の復活を圖るのには、どうしても經濟的にも自由獨立を圖らねばならぬ。

　之が爲めには日滿支三國の經濟を共通にし、東亜の適所に適業を設け、有無相通じて日本の指導により、綜合的なる經濟建設を實現せしむべきであらう。そして歐米の政治的色彩を帶べる資本主義の侵略を防遏すべきであらう。

　かくすることによつて東亜の經濟は復興するのみならず、支那の歐米依存の經濟も茲に匡正せられて、東亜は經濟的に白色人と平等對等の地位を獲得するに至るであらう。そして此の結果東亜民族は益々經濟的に相寄ることとなり、知らず識らずの間に右三民族は一體化され、東亜民族として世界の上に大なる存在となるに至るであらう。

　又文化的方面に就て考ふるに、東亜はもともと同一系統の文化で、日本は中頃西歐文化を容れて大いに歐化したるも、近時は大いに元に歸り、東洋文化の上に更に世界文化を建設しよう

と企てゐる。然るに支那は近時儒教を棄てて西洋崇拝となり、更に最近に於ては赤化思想に感染し去らんとしてゐること既述の通りであるが、これは正に支那民族の自殺行為である。今や日本は東亜の新秩序建設の中に文化的使命をも果さうとしてゐる。かくて此の方法により日本は支那民族を其赤化より救ひ、且又歐洲の物質文明の弊から救はうとしてゐる。さらば日本は支那文化にとりては一大救済主であらねばならぬ。加ふるに日本は已に篤と西歐文化を咀嚼し、再び東洋文化に立戻つたる折柄とて、日本は東洋文化の救済主としては誠に適任者といふべきであらう。

元来支那民族は文化によつて一團となつたものである。そして其文化は専ら儒教的文化である。日本は勿論此の文化を擁護しつゝ、新文化の建設に努力しようとするのであらうから、此の方法は支那民族を民族として救ふのみならず、更に之を向上せしむる所以でもある。そして更に此の方法はやがて又日満支三國民族を新文化の絆により一體化せしめ、茲に光輝ある廣大なる新東洋民族の一團體を現出せしめないでは措かぬであらう。

次に更に支那民族の将来に光明を與ふるの方法は、日支事變を契機として、今後更に一層大々的に両民族の接觸が行はるゝことであらう。そして此の方法は我民族が支那に進出するの數が大なる丈け、支那民族の再生に大なる影響を與へ、其光明の度を加ふるであらう。

顧みるに支那民族は其衰微の時期に當り、屢々北方より異族の来住を受けて、其血を新にし、以つて民族更新の途を開いた。金や元や清は即ち其役割を果したものと謂はなければならぬ。今回我民族は此の役割を果すの順序となり来つたのであるが、然し其役割たるや、其効果の大なること、金や元や清の比ではなからう。何となれば我民族は金や元や清のそれに比し、其人口に於て、遙かに大なるものがあるのみならず、其有する文化に於て、其等のものに比し勝れるものあるや勿論、支那のそれに比しても遙かに勝れてゐるといふ實情に在るからである。

思ふに我民族は人口超過に顧み、此の事變の結果、事情の許す限り、多數支那内地に轉住するに至るべく、其徴候は已に今に認めらるるものがあるので、此勢を以てすれば茲許數年を出ない間に、支那内地に於ける我人口は百萬に上るべく、此の百萬は支那四億萬の人口に比すれば、僅か其四百分の一に過ぎないけれども、此の數は更に絶えず本國より勢援を受くべきを以て、我民族は行く行くは支那内地に於て偉大なる存在となるに至るべきや疑はぬ。そして彼等

は、支那人との雑婚をも行ふべきを以て、其暁に於て支那民族は最早純乎舊時の支那民族ではないことゝなる。別言すれば、其民族は清新なる、我が大和民族の血を受けて、潑剌たる新民族を作るに至るべきや疑を容れぬ。そして衰亡しかゝつた生命を取り返すと共に、歐米白色人の奴隷的生活より免かれ、以つて東亞本來の精神に則り、歐米白色人と、平等の地歩に立ちつゝ、世界平和、人類文化の向上に邁進するであらう。事茲に到らんか、我が大和民族の支那民族に、及ぼせる効果は實に偉大なもので、其は金、元、清の民族が支那民族に、及ぼせる効果に比し、到底日を同ふして、語るべきものではない。そして、これを他方から考ふれば、日滿支三國民族を一體化せしめ、民族の向上進化にも、寄與貢獻すること大なるものがあるであらう。

以上余は我國が今回支那事變を契機として支那民族に對しなさんと欲する所、並に其結果浮び上らんとする支那民族に就いて述べた。然るに此の聖業に對し支那民族中往々疑惑の念を抱くものが無いとは言へぬ。歷史を顧みるに宋は異族金の侵入に對して極力之に抗し、明は民族主義の上から元を討ち、中華民國は滅滿興漢の名によつて革命の軍を起した次第もあつたので

支那民族中今回の我出兵を金、元、清のそれと同樣に見ようとし、民族主義の立場から大いに之を排擊しようといふものがあるのは無理もない。然しこれは支那史に於ける以上各異族の役割を充分に認識しないから提唱せらるゝ議論で、採るに足らない僻見であるのみならず、支那民族の根本精神は外族を容れ之と融合するにあるのであるから、支那民族中の識者は充分に此の事を熟慮するがよい。豈んや我國今回の出兵は金や元や清の如く征服の爲めのものではなく全く支那民族救濟の爲めのものであつて見れば、我國の企圖に對し疑惑を抱く支那有識者は飜然之を改め、我國の聖業に協力すべきであらう。そして共同防共、經濟提携と共に善隣友交の實を揚ぐることに全力を致すべきであらう。

次に又支那民族中には、從來の歐米依存の政策こそは支那民族を救ふ唯一の方法であるといふものがあるかも知れぬ。然しこれは歐米を知らないものの言ふ所で、少しく考ふれば其は却つて益々支那民族を窮地に追込む所以で、支那民族にとり危險この上もないことが、容易に首肯せらるゝであらう。

先づ彼等の人種觀念に就いて見るに、彼等は白色人を世界優秀の人種とし、他を劣等と見做

し、之に差別待遇を與ふるものであることは、世界周知の事實である。曾つて支那人が加奈太に於て排斥され、北米合衆國に於て排斥され、南阿に於て排斥され、濠洲に於て排斥されたる、皆其精神に出づるものである。此の人種に今日支那が救の手を求めようとするのは、これ全く彼を知らず、そして又己を知らないものと云はねばならぬ。

尤も今日歐米は盛に支那に救の手を出してゐるが、それは支那民族の爲めにあらずして、全く自己の利益の爲めに外ならぬ。別言すれば其により歐米は日本の勢力を疲弊せしめ、其疲弊に乘じ、支那を自由勝手にしようといふのであるから、其は支那にとり更に一層の危險を包藏してゐるものと謂はねばならぬ。

かくて若し日本にして疲弊せんか、支那は立どころに歐米の管下となり、支那民族は白色人の奴隷たるに至るべきや必然であらう。斯くの如きは四千有餘年の光輝ある歷史を有する支那民族の堪へ忍ぶ所ではない。

之を要するに支那民族の民族としての復活向上は、日本と協力することによつてのみ達成せらるべく、そして日本の眞意は、已に曩に述べた次第であるから、支那民族は安んじて我民族と提携し、以て其發展の道を講ずべきであらう。

尙更に支那民族が我と協力するに於て、特に余の注意したいのは、支那民族本來の理想が、人種平等主義に在るに顧み、此の主義を民族の名に於ても守り續けて貰ひたいことである。

思ふに此の人種平等の主義は歐米白色人諸國に於て固執せらるゝ人種不平等主義、並に之に關聯する有色人差別待遇主義と相對立するのではあるが、現在に於ては一向に顧みらるゝことなく、有色人種は白色人諸國により、非常なる虐待を受けてゐる。然し此の主義は人類生活の天則であつて、其適用宜しきを得れば、人類の共存共榮の目的は遂には之を達することを得べく、其主義の世界人類の福祉に及ぼす影響は甚大なるものあるべきを以て、支那民族に於ては其民族の保存を圖ると共に、此の主義を世界人類の爲め堅持すべきである。そして來るべき世界の競爭に於て、指導者たるの地位を獲得せねばならぬ。尙人種平等主義に關しては日本も已に、曩に巴里會議に於て之を表明するのみならず、其實現に努力したることもあるので、此の主義は又日支兩國の主義で、其が實現の爲めには、兩民族の協力が絕對に必要であると信ぜらる。何となれば從來は日支兩國反目の狀態で、この共通の理想が現實せられざるのみならず、

兩族とも白色人により卑下せられ排斥せられたのであるからである。

然しこの日支協同に關し、稍もすれば之を歐米白色人の人種不平等主義に對する復讐行爲であるかの如く見るものがあるかも知れぬ。然しこれは全然誤つた見方であつて、この協同の眞目的は寧ろ人種平等主義實現の爲めの準備工作と認むべきであらう。何となれば人種平等主義實現の爲めには實力の向上が極めて必要であり、そして實力の向上の爲めには、目下の大勢に顧み、同文同種相依ることが最も望ましき次第であるからである。

次に又余は此の際支那政治家に希望して置きたいのは、ゆめ偏狹の排他的の民族主義にあこがるゝやうなことがあつてはならぬことである。宋の民族主義や、明の民族主義や、中華民國革命時代の民族主義やは、政治上止むを得ざるに出でたものではあつたらうけれども、其思想や極めて偏狹にして排他的のものであつたから、此の際に於て斯くの如きは大いに戒めねばならぬことだと考へる。第一この偏狹な思想は日支民族融合の敵である。

之を要するに支那民族の運命は掛つて我國家の双肩に在り、そして支那民族は我と協力することによつてのみ立上ることが出來ること前述の通りである。然るに、之に對し歐米諸國は其

及ぼす影響に顧み、百方妨害を圖つてゐる。然し我國は斷乎として此の横鎗を排し、所信に向つて邁進すべきである。思ふに、神武天皇即位後二千六百年の間培養し來つた我實力は、必ずや此の聖業を完成せしむるであらう。勿論過去に於て豐臣秀吉は類似の事業を企てて失敗したが、然しそれは當時豐太閤個人の事業であつて、不幸にして國民の事業ではなかつたので、豐太閤の死去と共に師を還すべく餘儀なくされたものであつた。然るに今回は萬世一系の　天皇陛下を戴ける我國民の事業であるのみならず、又明治以來歐米の文化を咀嚼したる以後に於て企てたるものであれば、此聖業は必ずや達成せらるべく、支那民族に於ても充分に我實力に信頼して、我と協力すべきである。

かくの如くして支那民族は浮き上り、かくの如くして支那民族は再び、民族的進化を續け、將來世界史の上に更に一段の活躍を遂ぐるに至るであらう。これ支那民族今後の行方である。

# 結　論

余の玆に支那民族性の研究は大體以上を以つて決了した次第であるが、右研究の結果、結論として聊か重復の嫌あるも左に其得たる智識により我大陸策の遂行上教訓となり得るもの二三を記述して、更に大方の參考に供したいと思ふ。

先つ第一に我國としては支那民族の經驗に學び、其權內に在る又は權內に來らんとする異民族に對し、融合同化の手を延ばすこと。

支那民族は已に屢〻述ぶる通り數多異族の融合同化體である。融合同化其宜しきを得れば、民族は常に更新し、其生命を永續することを得るのである。これは支那民族の場合に於て好く之を例證してゐる。我國は異民族の取扱に於ては好く支那民族の例を學ぶべきである。そして好く之を融合同化すべきである。異民族の融合同化は不可能だとして之を放棄すべきではない。そして同化の方法は專ら文化政策で武斷政治は異民族の人心を收攬する所以ではない。

二　民族平等を本義とすべきこと

支那民族が其大を致したのは、そして又其が永續したのは、多くの學者は、支那が異族を平等視したるのみならず、之を平等に取扱つたからであると稱してゐる。この點は我對異民策に於ても大に考慮すべき點であらうと思ふ。異族に對して自己の優越を主張し、異族を蔑視することがあつてはならぬ。若し之を敢てする場合に於て其對異民策は終には失敗に終るに至るであらう。若し異民族にして文化に於て未だ我程度にまで發達してゐなければ、教育を施し之が向上を計るべきである。これ優秀民族の義務でもある。

三　俗に依つて治むること

支那で異族を支配するときは、概して其の風俗習慣によつて治むることゝしてゐた。元が漢民族を治むるときでも、矢張り其の各々の風俗習慣に依つて之を治めた。これは一面に於て支那民族が大をなした所以でもあるから、我大陸策に於ても大いに之を參考とすべきであらう。尤もこれは極端に主張すれば統一を失するを以つて、或は又融合同化を妨ぐるものなるが故に、適宜に斟酌せねばならぬことは勿論である。支那に於てもこの方針は極端に實行せられたので

はなかつた。

四　雑婚を奬勵すること

我國に於て雑婚は極めて忌むべきものと認められてゐる。それは國民の自負心から來るものが多い。然し純血主義は民族を強健且つ長命ならしむる所以ではない。英米及び獨等に於ては盛に純血主義が論ぜらるゝが、之は政策から來るもので、學理的のものではない。若しこれを是とし極端に實行するときに於て、其民族は活力を枯渇せしめ、自然に列國競爭上敗者の地位に陷らしめざるを得ないであらう。然るに支那に於ては「同姓不娶」どの諺もあるやうに、雑婚は國策としても歡迎せられてゐた。そして支那は此の故に民族融合の目的を達したのであつた。そしてそれは又民族として活氣付け永續せしめた所以でもあつた。故に我民族として今後大陸に發展する上に於て、地方民との雑婚は大いに之を奬勵する所あつて然るべきである。徒らに純血主義を固執し、英國人を以つて氣取ることは、我民族永遠の發展上大いに避くべきことであらう。

以上は支那民族研究の立場から、我大陸策に於て聊か學ぶべき點を指摘したのであつたが、

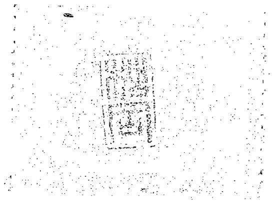


玆に問題となるは、支那の場合に於て其接觸した異族は大體に於て支那よりも文化に於て劣つてゐたものばかりであつた。從つて支那は他族融合上誠に惠まれたる地位にあつたのである。即ち他族は支那文化を仰いで之を師とするの風であつたから、このことのみでも支那は他族の融合上好都合であつたと云へよう。然るに現下我國にとりて考ふるに、我文化は大陸各民族のそれに比し優れてゐるものがあるか。そしてこれは曾つて支那文化が四隣の異族をして尊敬せしめたるが如く、現下の大陸諸民族を尊敬せしむべきものであるかどうか。これに關し吾人は自他共に許す意味に於て、「然り」と答ふることが出來るであらうか。聊か躊躇せざるを得ない。何となれば支那民族の大部は今や漸く西洋文化の優秀は之を認めたやうであるが、日本文化に關しては唯其模倣に過ぎないものと見てゐるのみならず、日本在來の文化は歸する所支那文化を受容れたものであるに過ぎないと見て、深く我文化に對し尊敬の念を持たないやうに見ゆる點があるからである。これは我が大陸策上異族を我に心服せしむる上に於て、極めて不利を感ぜしむる點である。然し東亞の協同は敢て一が他よりも優秀の地位に立つての問題でなく、双方平等の上に立ちてのものであるから、玆に文化の優劣は論ずるを要しないであらう。要す

るに兩民族は互に相提携して東洋文化の發展を圖り、以つて世界人類の向上に寄與貢獻すべきであらう。

鈴木兄弟製本

昭和十五年十月十日印刷
昭和十五年十月廿日發行



支那民族性の研究　奥付
㊝定價貳圓

著者　松岡壽八

東京市小石川區久堅町一〇八
印刷者　大橋松雄

東京市京橋區京橋三ノ四
發行者　鈴木利貞

發行所　東京市京橋區京橋三ノ四
株式會社日本評論社
電話京橋(56)四一九一—四
振替東京一一一六

共同印刷株式會社印刷